

デカルトにおける観念の二義性の意義
——観念の形相的実在性を中心に——

京都大学 榮福真穂

序

デカルトの「観念」概念の重要性は十分周知されている反面、その内実を理解することは思いのほか困難だ。その一因は、デカルトにおける観念が二通りのあり方——本稿では、デカルト自身の言い方に従って「二義性 *aequivocatio*」と呼ぶ——を持っていることにある。その詳しい内容については後述するが、簡潔に言うておくとすれば、二義性の一方は「外的事物を表象する」あり方を、他方は「(表象内容に関係なく) 観念それ自体が存在する何かである」あり方を表す。さて、後者は、観念の規定としては一見奇妙に思われる。さらに、前者(のちに詳述する「表象的実在性」)は『省察』における重要な論証において何度も繰り返し用いられるのに対し、後者(「形相的実在性」)は筆者のみるかぎり『省察』の反論と答弁を除く本文に一度しか登場しないという不均衡がある。先行研究においても、前者すなわち「表象的実在性」の『省察』における役割や重要性はしばしば指摘されるのに対し、後者すなわち「形相的実在性」の役割についてはほとんど問題にされてこなかった¹。しかし、『省察』「読者への序文」において「観念」という語のうちに二義性が潜んでいる(AT. VII, 8)と明言されており、デカルト自身がこの二義性に自覚的であったことは明らかなので、デカルトがまったく無意味な区別を与えていると解さない限りは、観念の二義性は何らかの必然性をもって設定されたものであると考えるべきだろう。

本稿はこの「形相的実在性」を中心に観念の二義性の意義を明らかにするため、以下の手順で議論を進める。まず1節では、『省察』において観念が二義的に語られるさまざまな表現を整理し、それらの間に共通する徴標を析出することで、『省察』における観念の二義性がどのようなものであるか確認する。次に2節では、『省察』におけるそれらの概念の意義を明らかにする。まず、観念の「表象的実在性」が、第三省察の神の実在の証明において重要な役割を果たしていることを手短かに示す(2.1)。そのうえで、観念の「形相的実在性」に焦点を当て、必ずしも明示的でないその役割について、神の実在の証明の厳密性との関わりと『省察』の体系全体との関わりという二つの異なる観点から考察する(2.2)。本稿は以上の議論を通じ、デカルトにおける観念の二義性の意義を包括的に明らかにすることを目指す。

1. 『省察』における観念の二義性のさまざまな表出

『省察』において、観念の二義性は多様な仕方で語られており、デカルト自身が言う「二義性」の実態そのものがそもそも自明でない。本稿は、まずその多様な語りの整理を行うところから出発しよう。『省察』では、観念の二義性が少なくとも次の四つの仕方で表れている。

- ①「質料的に」捉えられた観念／「表象的に」捉えられた観念
- ②「知性の作用」／「それ（知性の作用）によって表象されたもの」
- ③「思惟の様態」／「事物の像」
- ④「観念の形相的実在性」／「観念の表象的実在性」

これらを順に見ていこう。観念の二義性は、まず「読者への前書き」において、「質料的に *materialiter*」、「表象的に *objective*」という対概念を用いて提示される(①)。さらにその内実は次のように、すなわち、観念は質料的に捉えられるなら「知性の作用」であり、表象的に捉えられるなら「それによって表象されたもの」であると言われる(②)。これら2組の二義性は、デカルト自身によって「対」であることが明示されている。

次に、③「思惟の様態」と「事物の像」について見ていこう。『省察』においては「観念は——私の思惟の様態(*modus cogitandi*)であって——私の思惟から借りてこられる形相的実在性のほかにはなんらの形相的実在性をも、自分から要求することはない」(AT, VII, 41)と言われる一方で、「私の意識のうちにあるものは、いわば事物の像(*imagines*)であって、本来これにのみ、観念という名は当てはまる」(AT, VII, 37)とも言われる。後者における「事物の像」とは、私たちが頭の中に描く像、まさしく「イメージ」のようなものと考えてよいだろう。デカルトは以下のように言う。「たしかに、それら観念がたんに何らかの思惟の諸様態であるかぎり、私はそれら観念の間になんの不等性も認めない。[……]しかし、ある観念はあるものを表象し、他の観念はまた他のものを表象しているかぎり、それぞれの観念が互いに非常に異なっていることは明らかである」(AT, VII, 40)。ここから、「あるものを表象し」ているあり方、すなわち「表象像」と、「思惟の様態」とが、明確に異なるあり方であることが見て取れる。

最後に、④「観念の形相的実在性」と「観念の表象的実在性」との対比は、③の議論の延長線上に現れる。とりわけ、後者の「観念の表象的実在性」が『省察』において初めて用いられるのは、「表象像」と「思惟の様態」との対比が示された先の引用の直後である。「私に実体を表示する観念は、ただ様態すなわち偶有性のみを表現する観念よりも、[……]より多くの表象的実在性をそれ自身のうちに含んでいる」(AT, VII, 40)。ここでは、思惟様態とみな

されるかぎり観念同士の間には差異はないが、その表象対象に着目するならば観念は相互に差異を持つ、という先述の議論を展開する形で、実体の観念と様態の観念との間には「表象的実在性」の差異があると述べられている。他方で、上に引用したように、観念は「私の思惟の或る様態」であり、「私の思惟」からのみ形相的実在性を借りて来ると言われる（Cf. AT, VII, 41）。すなわち、「観念の形相的実在性」は「思惟の様態」として、等しく「私の思惟」に由来するものであり、そこには「観念の表象的実在性」において見られるような表象対象に相関した大きさの違いは生じない。

以上の③、④の分析を通じて明らかになってくるのは、一方のあり方（思惟の様態や形相的実在性）と他方のあり方（表象像や表象的実在性）が単に異なるというだけでなく、前者の画一性と後者の多様性との間に対比を見出すことができる、ということである。同様の対比は、①、②が示される箇所においても表明されている。「この語 [=idea] は、一方では質料的に、知性の作用と解することができる、この意味においては私よりも完全であるとは言えないが、しかし他方では表象的に、そういう作用によって表象されたものと解することができるのであって、この場合には[……]私よりも完全でありうる」（AT, VII, 8）。つまり前者はどれも等しく私の知性の「作用」でしかないが、後者は表象対象によって「私よりも完全」であったりそうでなかったりする、という多様性を持つのである²。

以上より、①～④の二義性に通底する、〈表象対象とは無関係に／表象対象に依存して〉、〈画一な／多様な〉という共通の徴標を析出することができる。前者の「表象対象と無関係に」あるあり方を観念に認めることは一見考え難いことかもしれないが、その意味内容については「実在性」という語と関係付けつつ次節であらためて検討しよう。少なくともここに、デカルトにおける観念の二義性の最も基本的な意味が析出された。個々の二義性の記述は、上記の大枠のもとに捉えられるものだと言えよう³。

本節でわれわれは、『省察』において観念が二義的に語られる多様な表現を整理し、それらに共通する対立軸を確認した。これらの表現の中でも、この二義性の意義を問う私たちは、「観念の形相的実在性」と「観念の表象的実在性」に焦点をあてる。この対概念のうち特に「観念の表象的実在性」は、『省察』の実際の論証において果たす役割が明確に読み取れるからである。次節では、『省察』において両概念がいかなる役割を果たしているかを見ていこう。

2. 『省察』における「観念の形相的実在性／表象的実在性」の役割

本節の議論に入る前に、「実在性 *realitas*」の意味について触れておく必要

があるだろう。というのも、この「実在性」は今日一般に用いられるものとは内実を異にするからだ。檜垣[2015]や Courtine[1992]が適切に整理しているように、近世哲学における実在性すなわち *realitas* の用法には「何であるか」「実際にあるか」の二つの流れがあり、今日言われている意味で「実在性」と言われうるのは後者であるが、デカルトの用法は前者であると考えられる⁴。ここから、『省察』における観念の「形相的実在性」と「表象的実在性」の、とりわけ「表象対象と無関係に」あるあり方だと前節で特徴づけられた前者の意味するところもよりよく理解することができる。つまり、観念の形相的実在性すなわち「観念が表象対象と無関係に何であるか」を問うならば、前述のように「思惟の様態」となり、それ以上に具体的・個別的な「何であるか」は与えられえず、それゆえ思惟の様態としての観念同士の間には「なんの不等性も認めない」と言われていたのである。他方、観念の表象的実在性とは「何を表象するか」という観点を含む「何であるか」であるので、表象する対象に応じてさまざまに異なりうる⁵。

それでは、こうした観念の「表象的実在性」・「形相的実在性」は、『省察』においていかなる役割を果たしているだろうか。

2.1. 第三省察「神の実在証明」における「観念の表象的実在性」

まずは「観念の表象的実在性」について見ていこう。この概念が重要な役割を果たしている箇所が、『省察』の第三省察における「神の実在のアポステリオリな証明」である。この論証は以下の手続きでなされる。

まず、この論証の出発点は、私たちが生得観念として持っていると言われる「神を理解するところの観念」にある。この観念を観察すると、それが「有限な実体を表示するところの観念よりも、明らかにいっそう多くの表象的実在性(*realitas objectiva*)をそれ自身のうちに含んでいる」(AT, VII, 40)ことが得られる。この明らかに傑出した「表象的実在性」を結果として生み出しうるような、傑出した「形相的実在性」を含む原因が存在するはずだ、と推論は進む。しかし、有限なものである私の中にそのような形相的な(=現実に存在する事物としての)実在性は見出されない(AT, VII, 42)。したがって、その原因となる何かは、私の外に実在する何かでなければならない。このように、結果である「観念内容としての神の大きさ」⁶から原因である「神そのもの」の実在へと到達することが、「神の実在のアポステリオリな証明」の骨子である。ここで注意しておかねばならないのは、この論証における「形相的実在性」は基本的に「観念対象となる事物そのもの」の形相的実在性であって、本稿が問題とする二義性の一端を担う「観念の形相的実在性」ではないということだ。当該の論証は観念の内部で、あるいは思惟の内部で表象

的実在性から形相的実在性へと遡っているのではなく、あくまで私の内にある観念から私の外の存在へと遡ることで、神の文字通りの実在を証明するものである。

この論証において「表象的実在性」が果たす役割の重要性については、前述のようにすでに多くの研究によって論じられ広く共有されているので、簡単な記述にとどめる。すなわち、この論証においては、観念の持つ表象的実在性の大きさの差異を生じさせる原因が、その観念の原因（＝観念対象）が持つ形相的実在性の大きさの差異にのみ求められうるということが論証の軸としてはたらいっている。さらに、当該の論証は、『省察』全体の行論から見ても重要な位置を占める。デカルトは第一省察での方法的懐疑ののち、第二省察においてコギトの実在という疑いえない事実にとどり着き、そして第三省察において神の実在を証明する。第三省察における神の実在の証明は、『省察』において初めて、「考える私」の外にある事物の実在が証明される場面なのである。つまり、コギトの実在のみが確証された独我的観念論の領域から飛び出し、「考える私」以外の実在も確証された領域へと至るための転換を果たすのが「神の実在のアポステリオリな証明」であり、ひいては「観念の表象的実在性」という概念装置こそがこの転換を可能にしていると言える⁷。

しかしここで、デカルトに以下のような疑義が向けられるかもしれない。すなわち、「神の実在のアポステリオリな証明」においては外的事物の実在を証明するために「観念の表象的実在性」が用いられるはずなのに、「観念の表象的実在性」を導入した時点で外的事物の実在を前提してしまっているのではないか、という疑義である。たしかに、観念の表象的実在性は表象対象に依存することによってのみ相互に差異を持つものなので、外的事物の実在をすでに含意しているように見えるかもしれないが、後述するように、デカルトの擁護は可能であるように思われる。しかしそれには、「観念の形相的実在性」の議論も踏まえる必要があるだろう。それゆえ、ここでは差し当たり、諸観念を観察することだけからそれらの間に表象的実在性の差異があることは発見されうる、とのみ注記しておくにとどめよう。

「神の実在のアポステリオリな証明」の概要および「表象的実在性」の役割は以上に示した通りだが、ここで一点、のちの議論のために注意しておきたい事柄がある。それは、「結果から原因へ」の遡及的な論証が成立するためには不可欠な、原因が持つより大きな実在性を結果が持つことはありえないという公理についてである（AT, VII, 40）。この因果律が〈観念の表象的実在性－観念対象の形相的実在性〉間にも適用されることにより、神の観念から出発して神そのものの実在へ到達することが可能となっている。キャローの言う

ように、従来のスコラにおいて「存在する」ものと見なされていなかった表象的実在性としての観念にも因果律を適用したことは、デカルトの観念説の持つインパクトの一つである(Cf. Carraud[2002], p.205)。ここからさらに、因果律の観念への適用を可能にしているのは、そもそも観念を「存在するもの(l'existant)」と見なすこと、すなわち「実在性」を認めることであると言えよう。しかし、観念に実在性が付与されることが「結果から原因へ」の神の実在証明の前提条件として必要であったとして、なぜその実在性は一種類でなく二種類でなくてはなかったのだろうか。前述のように、そこでは観念の表象的実在性と観念対象の形相的実在性が因果関係で結ばれていたが、このように観念には表象的実在性を、その対象となる外的事物には形相的な(現実に存在するものとしての)実在性を割り当てるだけではなぜ十分ではないのか。

2.2. 観念の「形相的実在性」の意義

こうして私たちは、なぜ観念に表象的実在性だけでなく、形相的実在性を付与する必要があったのか、という問いに至り着く。観念の形相的実在性(観念対象の形相的実在性ではなく)は、『省察』の反論と答弁を除く本文においては以下の箇所一度しか言及されない。

(a)この原因[=観念の原因としての外的事物]は、私の観念のうちに、なんら自己の現実的すなわち形相的実在性を送り込みはしない[……。]。むしろ、観念は——私の思惟(cogitatio)の或る様態であって——私の思惟から借りてこられる形相的実在性のほかにはなんらの形相的実在性をも、自分から要求することはない。(AT, VII, 41)

観念の形相的実在性に言及するこの記述は、第三省察の「神の実在のアポステリオリな証明」の途中に位置している。まずは、引用(a)に着目し、この箇所が当該の論証に対して直接的に寄与するところを検討しよう。

2.2.1. 神の存在証明の厳密性との関わり

引用(a)では、その前半においてまず、観念対象である外的事物と観念の形相的実在性との間の因果関係が否定される。形相的側面から捉えられたかぎりの観念は、外的事物を原因として持つことはない。続く後半では、観念の形相的実在性は「むしろ」、私の思惟のみから「借りてこられる」と言われる。したがって、後半部で示されているのは観念の形相的実在性の原因の正しい所在であると考えるのが妥当である。こうして私たちは引用(a)から、「私の思惟」と観念の形相的実在性との間の因果関係を読み取ることができる。

それでは、「私の思惟」と観念の形相的実在性との間の因果関係を提示しておくことが、「神の実在のアポステリオリな証明」においてどのような意義を持つのだろうか。まず、当該の証明においては、観念の表象的実在性を結果としてその原因である神へと遡るという仕方、いわば「結果から原因へ」の推論によって神の実在が論証されていた。このように観念の表象的実在性の原因が外的事物に求められるのに対して、観念の形相的実在性の原因は思惟そのものに求められる。つまり、観念の二側面のうち、外的事物と因果関係を取り結ぶことができるのは表象的実在性だけなのである。このことを強調しておくことで、デカルトは「結果としての観念から原因としての外的事物へ」の論証を補強することに成功している。というのも、それによって、観念の表象的実在性の無限な大きさの原因を外的事物ではなく「私の思惟」のうちへと求める、というもう一つの探究の方向性を排除することができるからである。

デカルトにおいて観念はつねに「結果」でしかないが、その「原因」は私の外（外的事物）と私の内（私の思惟）との二方向において考えられねばならない。たしかにある仕方では「私の思惟」も観念の原因になりうる。しかし「私の思惟」は、観念同士の間の実在性の度合いを生じさせるような仕方では、「原因」になることはできない。かくして、「有限な実体の観念よりも明らかにいっそう多くの表象的実在性」の原因の探究から「私の思惟」が除外され、外的事物こそがその原因だと結論づけられるのである。

このように、ありうる原因探究のもう一つの方向性を議論の俎上に載せた上で排斥することは、当該の論証をより厳密なものにすることに寄与していると言えよう。しかし、このことは当該の論証にとってもあくまで補助的な役割でしかなく、観念の形相的実在性の積極的な意義と呼べるものではない。これを論じるには、テキスト分析を越え、デカルト自身は明示的に語っていないことをその体系に鑑みつつ再構成する必要がある。

2.2.2. 『省察』の体系全体における意義——「私の思惟」への内在

観念の形相的実在性は、「私の思惟の様態」である（引用(a)より）。このことの意味をもう一度よく考えてみよう。「様態」とはそもそも、実体-様態という形而上学的な関係を背後に持つ語である。この関係を上の引用箇所当てはめると、「私の思惟」を実体、観念をその様態として理解できる。こうした図式での理解は、デカルトによる「実体」および「様態」の規定に鑑みれば、不当ではないことが確認できよう。たとえば『哲学原理』において実体は、第一義的には「存在するのに他の何も必要としないで存在するもの」(AT, VIII, 24) であり、厳密には神だけが実体であると言われる。しかし、「存在

するために神の協力だけしか必要としない」ものも副次的には実体と呼ばれる (AT, VIII, 24)。この意味で「精神」および「物体」も実体なのであり、実体としての精神の主たる属性が「思惟 cogitatio」である (AT, VIII, 24-25)。さらに、「精神のうちに見出される一切のことは、さまざまな思惟の様態にすぎない」(ibid.) と言われる。したがって、〈精神-思惟-思惟の様態〉の間に〈実体-属性-様態〉関係が成り立つと理解してよいだろう。同様の関係が、〈私-私の思惟-私の思惟の様態〉の間にも成り立つと考えられる。『省察』における「私」すなわちコギトの実在は、それ自体だけから、あるいは少なくともそれ自体と神だけから確証されるという意味で「実体」と呼ばれうるからである⁸。したがって、観念の形相的実在性すなわち「思惟の様態」は、「実体」である私の精神ないし思惟に依存・内在しているのである。

この「観念の形相的実在性の精神への内在」という事態において、観念が形相的実在性を持つことの積極的意義が生じる。その意義とは、感覚的なものを斥けて「私の思惟」だけを直接的源泉に神および外界の実在を証明する、という『省察』全体を貫く企図を成立させることである。デカルトにとって身体的・感覚的要素は精神を欺く主たる元凶であり（のちに第六省察において成立する思惟と延長との実体的区別もこのために重要である）、私たちは感覚的なものの排除というこの動機を『省察』の随所に見て取ることができる。こうした道行は、観念が形相的実在性も持っていることによって、言い換えれば、観念が「(その表象内容が何であるかではなく) それ自体として何であるか」を問うならば「私の精神ないし思惟へ徹底的に内在するもの」である、ということによって、初めて可能なものとなる。

いまや、先に触れておいたデカルトへの疑義——「観念の表象的実在性」を導入した時点で外的事物の実在を前提してしまっているのではないか、という疑義——に対して擁護を試みることができる。まず、上述のように、観念の形相的実在性が「私の思惟」にのみ由来する純粋に思惟的なものであることは『省察』の体系にとって必要であるが、その限りでは諸観念は等しく「私の思惟の様態」であることしかできない。このように観念それ自体が「何であるか」が明らかになった上でなお諸観念を観察すれば、それらの中には内容上すなわち表象的実在性において明らかに差が見られる。そして、以上のことは私の内にある諸観念を観察することだけから導出できる。それゆえ、観念の表象的実在性を措定することは、外的事物の実在を措定することを含意しない。デカルト自身、この論点先取を犯さぬよう、外界の実在を前提とせず観念だけから出発することに注意を払っており、たとえば第三省察冒頭では「たとえ私が感覚したり想像したりするものが私の外においてはおそら

く無であるにしても、私が感覚および想像と名づけるあの思惟様態は、たんにそれらがある種の思惟様態であるかぎり私のうちにあると私は確信しているからである」(AT, VII, 34)とされている。また、第三省察の時点では「私の外」に何らかの存在が保証されても、それが「延長的事物」であると明らかにされているわけではないので、第六省察で初めて成立するはずの思惟と延長との実体的区別を第三省察に不当に持ち込んでいるのではないか、という疑義も斥けられよう。私の観念の「私の思惟への徹底的な内在」ないし純粹思惟性を知ることが、延長実体を措定することを含意しない⁹。第三省察までにおいて明らかになるのは、「私」が思惟実体であり、観念それ自体はその「私の思惟」の「内」にあるが内容の上では「外」に由来する、ということであって、その外なるものが延長的であるかどうか、といったことは問題にならない事柄なのである。

結び

以上で本稿は、観念の二義性は非対称性も持つものの、どちらも——一方は重要な論証において明示的に、他方は暗示的ではあるが体系全体のいわば可能性の条件として——『省察』において意義を持つことを示した。一方で観念に精神の領域と外的事物との媒介の役割を果たさせつつ、他方で観念の純粹思惟性の確保によって身体性の介入による欺きの可能性を排除し、論証の確実性を獲得すること。これらの両立はたしかに一見不可能にも見えるが、デカルトは針の穴に糸を通すような慎重さでもってこれを成立させようとしている。『省察』において二義的に規定された観念説の「慎重さ」¹⁰ないし「煮え切らなさ」は、こうした異なる二方向への要請を背景に理解すべきものである。以上より、感覚的なものを斥けて「私の思惟」だけを材料に神や外界の実在を証明する、という『省察』全体のプロジェクトの成否の少なくとも一部が、観念の二義性に懸けられていると私たちは結論づける。

最後に、本稿がとりわけ着目した観念の形相的実在性が持つ思想史的意義に触れておきたい。観念が形相的実在性を持つということは、観念に「現実に存在する何か」としてのステータスを認めるということである。デカルトにおいて萌芽的に示唆されたこのあり方は、のちにスピノザにおいてその帰結を十全に引き出され、彼独特の観念説を成立させることになる。他方でロックにおいては「表象的」側面が引き継がれるが、その後の哲学史における「観念」概念の主流をなすことになるのはこちらの側面となった。しかし、観念を「思惟の様態」として、ある意味では「延長の様態」すなわち物体と同等に「現実に存在する何か」とみなす側面こそ、観念を単に認識論的にの

みならず形而上学的にも捉えようとした、17世紀観念説の一つの特異性を示しているのではないか。こうした哲学史的文脈において論じることは本稿では叶わなかったが、稿を改めて取り組みたい論点である。

注

(1) デカルトにおける観念の表象的実在性の重要性については、古くはマルブランシュをはじめとして、多くの論者によって指摘されてきた。古典的な研究としては Cronin[1987](repr:1966)が、より近年のものとしては Buzon&Kambouchner[2011]、Smith[2017]などが挙げられる。主な考察対象はデカルトより前の時代だが、まさしくこの概念の来歴を主題とする Marrone[2020]も近年上梓された。また、観念の二義性が争点の一つとなった歴史上有名な論争としてアルノー・マルブランシュ論争がある。この論争については Bréhier[1968]、Nadler[1989]に詳しい。

(2) 山田をはじめとする多くの解釈者において、この重ね合わせはほとんど無条件に認められている。Cf.山田[1994], p.197.

(3) こうした整理の仕方については、もちろん議論の余地はあるだろう。デカルトはこの二義性に自覚的ではあったが、十分に整理された仕方で提示しなかったため、そこに曖昧さが残るのは必定である。また、本稿が「第四答弁」において現れる観念の「質料／形相」の対概念(AT, VII, 232)を二義性の記述から捨象していることを断っておかねばならない。当該箇所では「質料／形相」の二義性のうち「形相」に表象的な側面が割り当てられており、本稿 1.1における二分法と齟齬をきたすように思われる。ここで、デカルトにおける「形相的」という語が少なくとも三つの意味を持つものであることに注意する必要がある。「現実に存在する事物として」、「形どられたかぎりで」、「ぴったり同じ」の三つである（それぞれ「表象的 *objectivus*」「質料的 *materialis*」「優越的に *eminenter*」と対をなす）。本稿は、この「形相的」の多義性によって議論が煩雑になることを避け、後者二つの意味における用例を捨象した。なお、「形相的」の多義性については武藤[1992]も指摘している。

(4) 檜垣によれば、*realitas* の二つの流れのうち一つは *res/ens* の対比を基礎としている。ひとつの同じものが、「それがある」ことが顧慮される場合には *ens* と呼ばれ、「それが何かである」ことが顧慮される場合には *res* と呼ばれる。この *res* の意味に準じ、*realitas* も「何性 *quiditas*」に近い意味を持つものとなる。もう一つの流れは、*res/ratio* の対比を基礎とするものである。ここでは、ただ概念においてあるものが *rationis* なものであり、「単に

そう考えられるだけでなく、実際にそうである」ものが *realis* なものと言われる (Cf. 檜垣[2015], pp.1-14, Courtine[1992], pp.178-185にも詳しい)。

(5) 本文で詳述する余裕はないが、「形相的／表象的」という対概念は少なくとも近世スコラに直接的源泉を求めることができるものである (Cf. Ariew&Grene[1995]; 村上[2004],pp.143-152)。スアレスは「知性がそれによって何らかのもの[……]を概念把握するような作用そのもの」を「形相的概念 *conceptus*」と呼び、「形相的概念によって個別にあるいは直接的に認識され表象された事物やことがら」を「表象的概念」と呼ぶ (Suarez[1965], pp.64-65.)。またゴクレニウスも『哲学用語集』の「概念」の項目において、「概念把握するあるいは認識する作用」(形相的概念)と「認識する作用によって概念把握された事物」(表象的概念)との区別を提示している (Goclenius[1613], p.428)。ただし、スアレスやゴクレニウスが「概念」にかんして設けていた区別を、デカルトは「観念」において使用しているという相違がある。この相違が意味するところは改めて論じられるべきである。

(6) Gueroult は「観念の表象的実在性」を「観念の内容」と適切に言い換えている。Gueroult[1970], p.73.

(7) こうした理解はいくつかの先行研究に見ることができる。たとえば Cronin によれば、第三省察において「彼[デカルト]は、独我論から逃れる唯一の方法は観念の表象的実在性を用いることだと主張」(Cronin[1987], p.1) しており、また「思惟する実体以外の存在者が現に実在することは、観念の表象的実在性から出発することによってのみ証明されうる」(Ibid., p.2)のと言う。

(8) 「コギト」がこの意味で実体であることは、多くの先行研究において認められていることである。Cf. ドヴィレール[2018], p.81.

(9) 山田の言うように、第三省察において外的対象と観念とは「*res extra me existens* と *idea quae in me est* という仕方で明確に区別されている」が、「それらは二つの独立した実在として二元論的に立てられているわけではない」。なぜなら、「観念はコギトの中から取り出されるゆえに確実な知ではあっても、外界の事物の存在や本質はこの段階ではまだ知られていない」からである。山田[1994], p.187.

(10) ビュゾンとカンブシュネルの表現を借りている。Cf. Buzon&Kambouchner[2011], p.56.

文献表

Ariew, R. and Grene, M., “Ideas, in and before Descartes.”, *Journal of the*

- History of Ideas*, Vol. 56, No. 1, pp. 87-106, 1995.
- Bréhier, E., *History of Philosophy: The Seventeenth Century*, translated by Baskin, W., University of Chicago Press, 1968.
- Buzon, F., et Kambouchner, D., *Le vocabulaire de Descartes*, ellipses, 2011.
- Carraud, V., *Causa sive ratio: La raison de la cause, de Suarez à Leibniz*, PUF, 2002.
- Courtine, J-F., „Realitas“, in Ritter, J., Gründer, K., Gabriel, G.(ed.), *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, 8, Schwabe, 1992, pp.178-185.
- Cronin, T., J., *Objective being in Descartes and in Suarez*, Garland Publishing, 1987, repr: 1966.
- Devillairs, L., *René Descartes*, PUF, 2013. (邦訳：ロランス・ドヴィレール『デカルト』，津崎良典訳，白水社，2018)
- Goclenius, R., *Lexicon Philosophicum*, 1613, in: <http://mdz-nbn-resolving.de/urn:nbn:de:bvb:12bsb11220964-9>, 最終アクセス日 2021/8/30.
- Gueroult, M., *Etudes sur Descartes, Spinoza, Malebranche et Leibniz*, George Olms, 1970.
- Marrone, F., *Realitas objectiva. Elaborazione e genesi di un concetto*, Edizioni di Pagina, 2018.
- Nadler, S., *Arnauld and the Cartesian Philosophy of Ideas*, Manchester University Press, 1989.
- Smith, K., “Descartes’ Theory of Ideas”, in Stanford Encyclopedia of Philosophy, 2017, in: <https://plato.stanford.edu/entries/descartes-ideas/>, 最終アクセス日 2021/8/20.
- Suarez, F., *Disputationes Metaphysicae*, Georg Olms, 1965, repr: Paris, 1866 (repr: 1597).
- 檜垣良成「Realität の二義性：中世から近世へと至る哲学史の一断面」，『近世哲学研究』19号，pp.1-39，2015.
- 松枝啓至『デカルトの方法』，京都大学学術出版会，2011.
- 武藤整司「デカルトにおける「質料的虚偽」概念の検討」，『高知大学学術研究報告 人文科学』41号，pp.253-264，1992.
- 村上勝三『観念と存在』，知泉書館，2004.
- 山田弘明『デカルト「省察」の研究』，創文社，1994.